

**PRAGMATICS**  
**SIG**

# 語用論事情

---

全国語学教育学会 語用論部会機関誌 (ニューズレター第34号) 11 (2), 2010年 夏

---

## Got milk?



アメリカのテレビで健康的ダイエットの方法として牛乳をもっと飲むように視聴者に促す広告シリーズがあります。この広告はコップで牛乳を飲んでできる白い牛乳のひげがついている有名人の写真を使っています。（コップの牛乳をすごく早くがぶ飲みして口の上のところにひげができる人がいますね。）上の広告は俳優のオーランド・ブルームです。この広告のスローガンは‘Got milk?’です。これらの広告はインターネットなどで流行りの‘Got .....?’をもじっています。例えば、

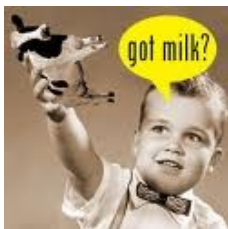
- ‘Got books?’ 本の寄付に
- ‘Got soccer?’ サッカーの情報に
- ‘Got junk?’ 廃品を棄てるのに
- ‘Got Jesus?’ 想像できますよね・・・

私はこの夏の休暇で米国にいました。ある日田舎道を車で走っていると、道路わきの地面に立てられた硬いワイヤーに貼り付けられている黄色い紙に書かれた手書きの看板を見つけました。

Got land  
Need a home  
I can help  
601-555-5555

どんな意味でしょう?色々な句読点や記号でこのメッセージはどのように変化するでしょうか?

さあ、このなぞは皆様にしばらくお預けしたいと思います。つまりは



語用論事情への寄稿を通して、皆さんのお声が聞けるのを楽しみにしています。ありがとうございます。

## Sybil Armstrong

日本語訳 小原 麻友美

## 目次

編集長からのメッセージ	1
語用論部会からのお知らせ	2
ジャーナルウォッチ	3

### 「語用論事情」を購読するには

JALT 会員:	1500 yen (部会会費を含む)
非JALT 会員:	2500 yen (この場合購読のみとなります)

# ***SIG NEWS/BUSINESS***

---



**新刊!**  
8月出版予定です。

## Pragmatics: Teaching Speech Acts

**Donna H. Tatsuki and Noel R. Houck**編。  
Teachers to Speakers of Other Languages, Inc.  
(TESOL)出版。オンラインTESOL bookstoreから注文できます。

『この本は研究やEメールで依頼をしたり、アドバイスしたり、職場で要望を出したり、意見を述べたり、仲間内で建設的な批判をしたり、拒否を示したり、という実地調査やTalkpointと呼ばれるウェブツールによるアクティビティの研究を通して語学論的仕掛けを学習者がどのように認識するかを論じている。』”(the TESOL web site, <tesol.org>より、日本語は語用論事情)

ご一読あれ! そして、語用論事情にレビューを投稿してください!



### ボランティアメンバー

ジャーナル・ウォッチ担当  
Akiko Hagiwara  
hagiwara@ls.toyaku.ac.jp

日本語訳担当  
Naoko Osuka  
naoko\_osukas@n01.itscom.net

日本語編集助手  
小原麻友美  
mami-oha@pp24.so-net.ne.jp

### 語用論部会役員

コーディネーター:代表  
Donna Tatsuki  
[dhtatsuki@rapid.ocn.ne.jp](mailto:dhtatsuki@rapid.ocn.ne.jp)

プログラムコーディネーター  
山下早代子  
[yama@meikai.ac.jp](mailto:yama@meikai.ac.jp)

カイト由利  
[ykite@ipcku.kansai-u.ac.jp](mailto:ykite@ipcku.kansai-u.ac.jp)

会計担当  
藤岡真由美  
[mfujioka42@hotmail.com](mailto:mfujioka42@hotmail.com)

Noriko Ishihara  
[ishi0029@umn.edu](mailto:ishi0029@umn.edu)

メンバー担当  
深沢清治  
[sfukaza@hiroshima-u.ac.jp](mailto:sfukaza@hiroshima-u.ac.jp)

川手ミヤジェイエフスカ恩  
[mierze@tuj.ac.jp](mailto:mierze@tuj.ac.jp)

宣伝担当  
Donna Fujimoto  
[fujimoto@wilmina.ac.jp](mailto:fujimoto@wilmina.ac.jp)

Mark Holst  
[markh@res.otaru-uc.ac.jp](mailto:markh@res.otaru-uc.ac.jp)

日本語編集  
川手ミヤジェイエフスカ恩  
[mierze@tuj.ac.jp](mailto:mierze@tuj.ac.jp)

藤岡真由美  
[mfujioka42@hotmail.com](mailto:mfujioka42@hotmail.com)

語用論事情編集長  
Sybil Armstrong  
[sarmstro@kansai-gaidai.ac.jp](mailto:sarmstro@kansai-gaidai.ac.jp)

出版物監修者  
Donna Tatsuki  
[dhtatsuki@rapid.ocn.ne.jp](mailto:dhtatsuki@rapid.ocn.ne.jp)

ウェブサイト担当  
Tim Greer  
[tim@kobe-u.ac.jp](mailto:tim@kobe-u.ac.jp)

ニュースレター頒布担当  
Carol Rinnert  
[rinnert@hiroshima-u.ac.jp](mailto:rinnert@hiroshima-u.ac.jp)

## JOURNAL WATCH

---

Edited by Hagiwara Akiko

神戸のPLLに行ってきました。これを読んでいる多くの皆さんも行かれたことと思います。研究発表をいくつか見に行きましたが、その中に会話分析関係のものもありました。学会では会話分析の発表に行くのが好きなのですが、会話分析の論文を読むのは、あまり得意ではありません。他の分野の研究論文と違って、会話分析の論文はいろいろな記号のついたデータの部分と説明の部分を何度も行き来しなくてはならないからです。ビデオを見ながらなら問題はありません。発表の場ではビデオがあると、発表者のいっていることが本当によく分かるのですが、トランスクリプトだけでは、一生懸命状況を想像しなければなりません。たくさん会話分析の論文を読み続ければ、そのうちトランスクリプトをもっとスムーズに読めるようになるんじゃないかとは思いますが、こんなことを考えながら次の論文を読んでみました。

**Kuroshima, Satomi.** 2010. Another look at the service encounter: Progressivity, intersubjectivity, and trust in a Japanese sushi restaurant. *Journal of Pragmatics* 42, 856-869.

この論文を最初に見たとき、日本のお寿司屋さんで取ったデータかと思いましたが、実はロサンゼルスのお寿司屋さんで収集したものでした。そのため、会話は主に英語で行われ、たまに日本語のフレーズが出てきます。Kuroshimaは寿司屋のカウンターにおいて行われる会話の sequence organizationを見てみました。非常に面白いと思ったのは、寿司屋の主人は、英語は明らかに第二言語話者ではあるが、寿司屋としてはプロであるということです。主人は客とのやりとりの中で、客

の注文に対しイントネーションの下がった返答か、同意を求めるような返答をしています。Kuroshima は シェグロフの progressivity と intersubjectivityの枠組みで説明を加えています。具体的には、注文とOKまたは「はいよ」という返答を1つの sequence とし、その間にどのような sequence が挿入されるかを分析しています。主人による客に対する確認を求める依頼表現と客の確認の会話が挿入されることにより進行性 (progressivity) は犠牲になるものの、主人と客の間に間主観性 (intersubjectivity) が生まれ、結果として信頼関係が築かれるということ (のよう) です。

---

最近Speech actsの論文を目にすることが減ったような気がしますが、談話完成課題(DCT)を使用した研究報告を2つ見つけました。両方ともDCTが研究の主なデータ方法としてはさんざん批判されていることを承知しつつも、習得の発達状況を調べるために使用しているようです。

**Long, Christopher.** 2010. Apology in Japanese gratitude situations: The negotiation of interlocutor role relations. *Journal of Pragmatics*, 42, 1060-1075.

この研究は主たるデータ収集をDCTを用いて行い、「すみません」「ごめんなさい」といった謝罪/感謝表現の使用を調べました。場面設定において、物理的/肉体的な負荷が高いほど、聞き手の社会的地位に関わらず、これらの表現の使用頻度が高いことを分かりました。これは、Brown and Levinsonのポライトネスの理論をサポートしています。後半では、日本人の子供のデータを分析しています。1年生でもこれらの表現を使っている

子供がいましたが、中学生になると大人のように使っているということです。Longは小さい子供たちは、これらの表現の使用法を知っているが、普段はままごと以外では、あまり使わないと分析しています。このような子供の言語の知識を知るためには、どのように行うのだろうかと思いました。子供たちは大人の言語表現をたくさん知っているようだが、自分たちの言語では使用しないものも多いのかもしれない。もう少し子供の言語発達の論文を読んでみたくなりました。

---

**Chang, Yuh-Fang.** 2010. 'I no say you say is boring': the development of pragmatic competence in L2 apology. *Language Sciences* 32, 408-424.

この研究もまたDCTを使用し、中国語母語話者の子供が第二言語である英語の謝罪表現をどのように習得しているかを調べています。ChangはCCSARPで使用されたような分類法を使用し発達のパターンを見てみました。初期においては、定型表現の "I am sorry" が多く現れているが、あとになると「許しを請う」表現が出てくるようになります。"Please forgive me" のような定型表現を使用した「許しを請う」表現は、文法的には平易ではあるが、その発現は遅いということは、語用的な理由によるものと説明しています。

この2つの論文を読んでいて、なんだか90年代のことを懐かしく思い出しました。

